

提携米通信

2014年2月号・黒瀬農舎



高知 伊予十川の豊かな水 2014.01.21

予想外に雪が少ない1月でした。

「秋日は大雪」という全国ニュースがクリスマス頃より何度も出ています。また、私たちの地域の天気予報でも「暴風雪注意報」や「大雪警報」などが正月からも何度も出ました。ところが実際には、秋田市以北は青森市まで積雪はほとんどなく、我が家でもポンコツですが、大型の除雪機を準備したにもかかわらず、出番はほとんどありませんでした。

しかし、秋日も南部の横手、湯沢地方では40年ぶりの大雪で、雪の本格的な時期はこれからだというのに、自治体の除雪予算は1月4日で底をついたと悲鳴を上げていると報道されています。

先号でふれたように、今年の雪は、旧地味型あらわです。半地味今後を心配しています。

ところで、数日前に友人と会うために久しぶりに南区・高知県を訪ねました。

半地は今年雪が少ないとは言っても、主要道路の路面に雪がないというだけで、結構寒く、日銀の世界です。

秋日から大阪空港で乗り継いで高知空港に着くと、太陽は燦々、一面緑の世界。秋日の5月の景色が拡がっていました。羨ましい限りでした。

余り時間ありませんでしたが、伊予十川に立ち寄り、幾つかある有名な「沈下橋」毎に遊覧和船が数艘づつあったので、その一つに乗ってみました。

遊覧時間30分程度の軽便ですが、岸からとは大きく違った和船からの眺めは風情があって、真冬の澄んだ伊予十川の水の豊かさを滲みさせてくれました。

船頭さんのお話だと、伊予十川の古手に菜の花や桜、ツツジが咲く3月下旬から4月上旬はさらに絶景だと言うことでした。

ところで、屋外の作業ができない冬の間も結構仕事が多くのおんびりしておれません。「農閑期」などと思っているとアツという間に時間が足りなくなります。

種蒔き作業月の毎々の機械や日植え後に使用する除草機などの修理、改良などこれから種蒔き準備までの1ヶ月半、忙しい日々が続きます。

提携米 黒瀬農舎

〒010-0445

秋田県南秋田郡大潟村西1丁目4の7

黒瀬 正・友基

TEL:0185-45-3088 FAX:45-2887



E-mail: akita@kurose.com Web: [提携米 黒瀬農舎](#)

検索

★年末年始のご旅行や贈り物でお米が余った場合は、早めに一回パスや減量のご連絡をお願いいたします。
★お餅は防霉剤など使用していませんので、袋の傷などで、未開封のお餅にカビなど出ることがあります。賞味期限内は代品をお届けします。ご連絡をお願いします。

メールフォームやパソコン/携帯のメールでご連絡頂いている方へ
黒瀬農舎からの返信メールが自動的に迷惑メールフォルダに分類されていることがあるようです。返信のメールが届かない場合は迷惑メールフォルダの確認やメールの設定をご確認ください。

今年是我们的大潟村诞生50周年了。



私たちの村・大潟村は、今から50年前の1964年（昭和39）入郎湖が干し上げられて間のない10月1日に秋田県で第69番目の自治体として生まれました。

でも、誕生時は、工事に関わる6世帯わずか14人の人口でした。

その後、湖の造成や住宅、学校など公共施設の工事進行に合わせて、昭和42年から49年に全区から580戸が移住し、人口約三千人の自治体となりました。

元々の入郎湖は琵琶湖の約3分の1の面積を持つ、日本で2番目の大きさの平均水深1メートルの浅いフライパン状の湖でした。

戦後の食糧難の中で世界銀行の調査団が来日し、干拓の専門家オランダのヤンセン氏の指導と世界銀行からの借款が決定して、昭和33年から干拓工事が始まりました。

周囲50Km余りの堤防が完成し、干し上げて農地造成工事にかかる頃には、戦後の食糧難は解消していました。

そこで、半時の政府は、明治時代の北海道開拓から続けた「食糧増産」と「就業の場の提供」という開拓干拓事業の2つの政策目標とは根本的に異なった、大規模で近代的な所得性の高い稲作経営と、近代的な農村社会のモデルを創ることを目的とて、全区に参画農家を募りました。

このため、入郎湖の水を抜いて出現した1万7千餘りの新生の大地は、従来ならば近接の自治体（市町村）に一括編入または、分割編入するのが普通ですが「近代的なコミュニティ」造りのため、わざわざ地方自治法の特例法を作り「大潟村」という独立した自治体を創設したものです。

また、一般の農家の水田経営面積は1畝程度であった中で、1戸半たりの水田経営面積を15畝という半時としてはとてつもなく大規模にしました。これに対応する生産の農業機械がない時代でしたので、フォードやファーガソンなど外国製のトラクターや収穫機械を導入することになりました。

前号でも紹介した、我がHPの資料室の「TPPや減収見直しなど平成25年末の農業農政問題」に載せているように、私は、今から39年前の昭和49年に、旗サラして、滋賀県から日本列島を900Km北上してこの地に家族4人で移住しました。

手に取れた水田15畝は、水田とは言っても、入郎湖の湖底ですので、ぬかるんだ膝まで沈む泥沼。

重いトラクターやコンバインなど農機は時々沈む。引き上げに使うトラクターやブルもまた沈むということがしばしばでした。

また、半時は日本で日植機が開発されて日が浅い時代でしたので、このような悪条件の日植で使える日植機はなく、始めの3年間はパートの女性の応援で手で日植えを行っていました。

4月下旬から始まる日植えの準備作業から2ヶ月余りは、早朝から月夜の日は夜遅くまで、泥んこになっての日植作業で、帰宅して風呂に入れば、そのまま爆睡という日が続きました。

しかし、体体的にはハードでしたが、実に楽しい日々でした。

（半時としては大規模な）合理・効率的な稲作経営が安定して10年余り経過後は、経営方針を徐々に転換して、専業的な稲作農家でこそ可能な、高効率な有機農業に切り替え、農薬や化学肥料に頼らない美味しさと安心安全を追求したお米を全区の消費者の皆さんにお届けしています。

日本の農業はこの10年で大きく変わり、今後更に大きく変わろうとしています。

10年余り前まで、「とてつもなく」大規模であった15畝の経営規模は、今では全区各地に50畝、80畝規模の水田経営が散在するようになってきました。我が村の農家の規模は「弱小規模」に分類される時代になりました。

今後我が家でも、生産コスト低減や生産性の向上を無視することはできませんので機会があれば少しは規模拡大も考慮する必要があると思いますが、20年前に転換した美味しさや安心安全など高品質の追求を重視したお米作りの基本は不変としたいと思っています。どうぞ今後もご支援をお願い致します。



干拓前の入郎湖